The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カントーにおける植物利用とローカル・ナレッジについて
Author(s)	宇都宮, まゆみ
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 11, p. 87-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48336
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【第2部】

メコンデルタ

カントーにおける植物利用とローカル・ナレッジについて

宇都宮まゆみ　大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

1. はじめに

本稿では、2012年8月17日〜23日に実施した聞き取り調査及び観察に基づいて、ベトナムのメコンデルタにあるカントー（Can Tho）市における植物利用とローカル・ナレッジについて特定の事例を用いて考察する。そして、今回はその中でも「南薬」[1]と呼ばれる薬用としての植物利用に焦点を当て紹介を行う。

カントー市は、国際河川であるメコン河が流れ、メコンデルタ地帯の中心に位置する。そこは、ベトナムの中でも[2]肥沃な土地を持ち、多様な種類の植物が観察される地域のひとつである。その豊かな植生ゆえに、同地域において多様な植物利用のあり方が観察されている。Zimmermann（1951）が指摘するように資源というのは資源であるのではなく「資源になる」のであり、豊かな植物利用の裏には人々の豊富な知識の存在が確認できる。しかしながら、一方で、近年の同国における著しい経済発展、世界におけるグローバル化の流れ、及び今後考えうる環境の変化の中で、研究対象地の人々と資源の関係についても様々な影響を受けていることは予想に難くない。一般にモノが「資源化」がされる際には、単一の目的が存在し、それは同時に従来存在した複合的な価値が見えなくなることを意味するが、同地域においても「資源化」の過程の中で資源の価値の変容が見られうると考える。

1　ベトナムには中国の東洋医学に基づく知識資源だけではなく、食用薬草を中心として構成される南薬というものが存在する。南薬というのは、同国において中国の東洋医学における漢方薬（同国では北薬と呼ぶ）と対比されたもので、まさにベトナム独自の土着の知の産物であると理解できる。

2　ベトナムは他の東南アジア諸国と同様、生物多様性が豊かで固有種も多い。例えば、新井（2001）では維管束植物に関して言うと12000種の生育が推測されているが、その10%以上が固有種とされている。

従って、本稿においては更に、植物利用の事例を紹介するとともにその利用を支える「知識」に注目して、人類学的考察を行う。

本稿で取り扱う知識はTEK（Traditional Ecological Knowledge）として理解することができ、近年、様々な分野で注目を集めてきた。特に開発の分野では、発展途上国と呼ばれる国々の土着の知（indeginous knowledge）は、1970年代まで非科学的だと抑圧されてきたが、その土着の知を無視し一方的に先進国諸国が科学技術を押しつける開発手法の失敗が明らかになってきたことより、1980年代以降は、土着の知を持続的な開発のためにいかに役立てるか、という研究と実践が始まっている。

本稿においては、大村（2002）が指摘するように知識というものが日々の個人の実践の中で生成される動態的なものであるという視座に立ち、知識の性質や成り立ちに注目し論を展開することで同調査地における植物利用とローカル・ナレッジの理解に努める。

調査においては、後で紹介するように単作の失敗から植生の多様性を重要視する人々の事例も観察された。GLOCOLの主催する調査研究においては、メコン川の流域において、多様な植生と豊かな自然を持つ中国雲南省とベトナムカントー市に関する論稿が提出されている。今回、筆者がメコンデルタで調査した事例を、メコン川流域におけるヒトと自然の関係性を理解し考察する上で、参考にしたいと考える。

2. カントー市における植物利用

ここではカントー市における植物利用に関して、農村における家庭の個別事例を紹介し考察を行う。上記で述べたように本稿においては本地域における知識のあり方を捉えることも目的としており、単なる植物利用の紹介に留まらず、個別の事例を詳細に記述し紹介することに努める。

〈ミィトゥアン（My Thuan）村の事例〉

●村の概要

ミィトゥアン村はミィカン（My Khanh）行政村のひとつである。カントー市に位置し、150の世帯の人びとが生活をしている。筆者の聞き取り調査によると、1975年までは多くの土地が水田であったが、その後、現金収入を得るために多くの人びとがオレンジの栽培を始めた。しかしながら、1983年に失敗し現在はオレンジの栽培は行っていない。本村はVACB[3]のモデル地区とされており、各家庭において資源の活用のためにバイオガスの利用が促進されている。筆者の観察によると多くの家庭が庭を所有しており、そこでは商品作物だけではなく多様な植物が観察された。

●植物利用の具体的な事例

・木の防腐防止の例

木が防腐するのを防ぐため*Gossampinus malabarica*（Cây gòn）が使用されていた。本村は川に隣接した地域であり、水が豊富な地域である。家庭によっては庭の中に池及び堀をもつ家もあり、そこには木でつくられた橋が使用されている。従って、人々は写真1のように木製の橋の周りに上記の植物を植えている。

写真1:*Gossampinus malabarica*

・水の浄化の例

水の浄化作用持つとして知られているホテイアオイ（Lá lục bình）が本調査地においても水を浄化する目的で利用されているのが確認された。今回の聞き取り調査においては、ホテイアオイと*Wolffia arrhiza*（bèo cám）という2つの水草が水を浄化する植物であるとされた。なお、*Wolffia arrhiza*に関しては、それが魚のエサやまたメタンガスを作る原料として最適であるという声も聞かれている。つまり、後に紹介する事例にもあてはまるが、ひとつの植物が単一の目的で使用されているのではなく、人々は様々な目的で利用を行っていることが理解できる。

写真2：*Peristrophe bivalvis*

・食べ物の染色の例

食べ物の染色に関しては、2つの植物の利用が観察された。ひとつは*Pandanus amaryllifolius*（Lá dứa）であり、食品を緑に染色する。この植物に関しては糖尿にも効果があるということが聞かれた。また、紫に染色するために*Peristrophe bivalvis*（Lá cẩm）が使用されるということであった。

3　VAC農法にバイオガスの発生装置を付加したシステム。

・燃料の事例

本調査地においては調理の際に薪を使用する例が見られた。薪の使用は他地域においても一般的であるが、生物資源の利用という観点から本村においては電気やガスが普及している一方で薪を使用する家庭が観察されていることをここでは紹介しておく。ある女性からは薪で調理すると、ずっと火の前にいる必要がなく子どもの世話をするなど他のことができるから良いという声が聞かれており、薪の使用の利便性が説明された。また、ある男性においては木の枝が周りにあるので使っているという発言が聞かれており、ここの人びとが身の周りの生物資源を利用しながら生活していることが理解できる。

写真3: 農家の台所

・薬用効果を目的とした例

今回の調査においては様々な事例が紹介された。調査の方法としては、庭を見学させてもらいながら実際に植物を一緒に見て用途を説明してもらうという方法と、ある症状に効く植物はなにかをインタビューで聞くという2つの手法をとった。従って、調査期間及び調査方法に限界があり、今回の調査で知ることができなかった多様な利用法の存在があることが予想される。ここでは、今回の調査結果の中で得られた、いくつかの事例を用途別に紹介したい。

使用法に関して述べると、植物の液をそのまま皮膚に塗る、煮出して飲む、ミキサーにかけてジュースとして飲む、植物を煮た後に蒸気をあてるなどが見られている。*Centella asiatica* が熱の際に体を涼しくするため飲まれている事例などは、ベトナムにおける熱冷理論[4]に基づくものと理解できるであろう。

そして、特に注目すべき点としては、ベトナム北部における南薬の利用を紹介した板垣(1998)やベトナムにおける民族植物学の祖と呼ばれているド・タット・ロイ(Đỗ Thất Lợi)の文献において各植物の持つ効能の紹介が見られるのに対し、今回の調査においては複数の植物を組み合わせて使用する事例が見られたことである。筆者は、カントー市におけるスァン・カイン(Xuân khánh)市場とカイケー(Cái khế)市場を訪問した際にも、複数の植物が組み合わせて売られているのを観察した。このことから、複数の植物を組み合わせて使用することは、この地域においては特徴的なのではないかと推測する。また、東洋医学における漢方薬が乾燥した植物を利用しているのに対し、ここでは煮るという事例は見られるものの基本的に生の状態で利用していることも注目に値する。また上記で紹介した植物に関しては、インタビュ

4　住村(2006)によると、中国の陰陽五行説に対し、ベトナムにおいては食物に関して涼しい/熱い/どちらでもないという分類が見られており一般的に「涼しい」という分類には肯定的な価値を持っているものと理解される。

表：植物の薬用利用

症状	使用される植物の学名	ベトナム語名	使用法	備考
切り傷	*(Eclipta alba Hassk)*	Thuốc Hàn Cỏ mực Cỏ thuốc heo	葉っぱをちぎり、汁をつける。止血効果がある。	
熱	*(Lemongrass)* *(Adenosma caeruleum)* *(Centella asiatica)*	Lá sả lá bồ bồ lá giáu Rau má	左記の3つの植物を茹で蒸気を当てる。 ジュースにして飲む。	体を涼しくすることを目的としている。
風邪	*(Citrus maxima)* *(Mangifera indica L.))* *(Psidium guyjava L.)* *(Broussonetia papyrifera L.)* *(Colocasia esculenta)*	Lá bưởi Xoài Lá ổi Xa Môn	左記の植物5つを鍋に入れて煮て朝・夕2回その蒸気を浴び、汗を出す。	
咳	レモン水 *(Ageratum Conyzoides)*	 Cỏ cứt heo	 つぶして飲む。	涼しい状態にするため。 殺虫や止血にも使える。
糖尿		Mía lau		
下痢	*(Psidium guyjava L.)* 砂糖なしのコーヒー	Lá ổi Gối	つぶして飲む。 根っこを煮て飲む。	子どもには西洋薬を与えるという意見が聞かれた。
痔	*(Xanthophyllum glaucum)*	Cây gạt nai	酢につけたのちに火にかけて、お尻に蒸気をあてる。1日1回を9日続ける。	
利尿	*(Crinum latifolium L.)*	Trinh nữ hoàng cung	煮だして飲む。	

イーによるとほとんどが自分の庭にあるものであり、ない場合は隣近所にもらいに行って使用するということであった。

薬用効果を目的とした利用に関する知識について述べると、上記で説明したように基本的には身の回りにある植物の利用に基づいている。また、上記の表からも理解できるように今回は用途別に整理をして情報をまとめたものの、ひとつの植物に対して利用法は多岐に渡ることが理解できる。また、上記で挙げた例には限界があるものの多岐に渡る症状に対する植物の利用法が挙げられ、今後、どのような症状にどのような植物を利用するかの知識を考察していくことも重要であろう。

あるインタビュイーからは、1992年に、自身の息子が肝臓の病気になった時に、抗生物質を飲んだが効果がなかったので、彼が植物を使って息子のための薬をつくり、それを息子が1週間飲んだら治ったという話を聞いた。また、彼は普段、熱が出たときは薬草を使用するが、外出中においてだけやむをえなく抗生物質を使用するとも答えている。ここでは近年の生物医学に基づいた科学的な見地から上記で紹介した薬草の効果について考察したり、論を展開することはしないが、少なくとも今回のインタビュイーにおいては上記の植物の効果に対する高い信用と彼らの生活の中でひとつの重要な役割を担っていることが考えられる。

また、庭を訪問しながら植物利用に関する聞き取り調査に応じてくれた64歳男性のインタビュイーに筆者が「なぜ、あなたはそんなにも植物の利用に関して多くの知識を持っているのですか?」と聞いた際に「(これらの植物が)ここにあるから」という答えが聞かれた。ここから、上記で紹介した植物を巡る知識が土地に基づいたものであり、言い方を変えるとそれらの知識が彼らの生活に組み込まれたものであると理解できる。

3. まとめ

今回の調査においては、多様な植物の利用が観察された。それは彼らの生存基盤の一部をなしていると理解できる。筆者も参加して調査した雲南における事例においては、地域が市場経済に組み込まれていく様子が紹介され、その過程における自然と人の関係性の変化が紹介されていた。これに対し、このメコンデルタの事例においては、市場との関わりはあるものの、自身の家庭菜園というある種の閉じられた空間の中で植物を確保し利用を続けている例が見られている。

メコンデルタの調査のインタビュイーの中には植物の利用法をあまり知らず、薬に関しては西洋薬を好む人もいる。しかし、村全体に植物が豊富にあり、電気やガスがあるにもかかわらず薪を使用している例などからも、他の事例とは異なる自然と人間の関係性の例として理解できる可能性を持っているように思われる。

参考文献

Zimmermann, Erich
1951(1933)　*World Resources and Industries: A Functional Appraisal of the availability of Aguricultural and Industrial Matelials.* New York: Harper and Brothers Publishers.

板垣明美
1998　「〈特集〉ベトナムの人類学的研究ベトナム・ハノイ地域の南薬に関する医療人類学的研究」『東洋文化』78号、159-182頁。
1999　「ベトナムのハノイ地域にみられる「戦いと癒し」 ―伝統医療の文化社会的フィードバック機能に関する一考察」『ベトナムの社会と文化』第1号、34-51頁。
2008　「『南薬神効』と民間ハーブ医療」板垣明美編『ヴェトナム 変化する医療と儀礼』春風社、155-178頁。

新井正久
2001　「ベトナムにおける自然環境保全への取り組みについて」『国立公園』国立公園協会。

大村敬一
2002　「「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えて：交差点としての民族誌の提言」『国立民族学博物館研究報告』27巻1号、25-120頁。

住村欣範
2006　「ベトナムにおける植物利用と「健康」：食と医の間」『大阪外国語大学論集』35巻、129-144頁。

内堀基光(主編)
2007　『自然と人間』弘文堂。